



 Data	2025-17
監督・脚本: 張大磊 (チャン・ダーレイ)	
出演: 周迅 (ジョウ・シュン) / 王一博 (ワン・イーボー)	

👁️👁️ みどころ

人気沸騰中の若手俳優・王一博 (ワン・イーボー) と往年の (?) 美人女優・周迅 (ジョウ・シュン) の共演にビックリなら、24 分の短編と知って、さらにビックリ! そして、張大磊 (チャン・ダーレイ) 監督は本作について、「これは別れと出会いについての短編映画である。」と解説しているが、そのコロは如何に?

時代は 1990 年。物語は中国の地方都市における北京でのアジア競技大会の閉幕式とその翌日の、ちょっとした別れと出会いだが、この設定はまさに本作の原題の『我的朋友』にも邦題の『銀幕の友』にもピッタリだ。

劇中劇として上映される映画はフランソワ・トリュフォー監督のヌーベルバグ作品『大人は判ってくれない』(59 年) だが、それは一体なぜ?

単純な物語だが、心に残る余韻をタップリと・・・。

———— * ——— * ——— * ——— * ——— * ——— * ——— * ——— * ——— * ———

■□■ 24 分の短編だが、共演の王一博と周迅に注目! ■□■

2002 年以降、弁護士兼映画評論家を (勝手に) 名乗り、『SHOW-HEY シネマール』の出版を続けてきた私は、かつて神戸大学の映画研究会の招待を受けてその発表会の審査員を務めたことがある。また、2015 年 6 月には北京電影学院で開催した「『実験電影』学院賞」の審査員を務め、授賞式に出席したこともある。そんな小さな映画祭で上映される作品は 10~20 分の短編ばかりだが、短編だからといってバカにしてはダメ。短編ではテーマは単一のものが多いが、そうであるため逆に、ある意味で分かりやすく面白い作品に出会うことも多い。

他方、周迅 (ジョウ・シュン) といえば、私が中国映画にのめり込むきっかけになった陳凱歌 (チェン・カイコー) 監督の『始皇帝暗殺』(98 年) (『シネマ 5』127 頁) で盲目の

少女役を演じて、私の頭の中にインプットされ、続く『ふたりの人魚』(00年)、『シネマ 5』253 頁)、『女帝 エンペラー』(06 年)、『シネマ 17』298 頁) 等でさらにその印象を強めた、大きな目が魅力的な美人女優だ。また、王一博(ワン・イーボー)といえ、中国の TV 時代劇『陳情令』(19 年)で大ブレイクし、映画初出演の『無名』(23 年)、『シネマ 56』130 頁)や続く『ボーン・トゥ・フライ』(23 年)、『シネマ 56』138 頁)を大ヒットさせた、長身イケメンの若手俳優だ。そんな新旧(?)2 人の超有名俳優を共演させた本作は一体どんな大作?一瞬そう思ったが、それが何と 24 分の短編だ。

■監督は?初上映は?今なぜ日本で公開?■

本作の監督は張大磊(チャン・ダーレイ)。『八月』(16 年)で台湾の第 53 回金馬獎の最優秀作品賞を受賞した監督だが、寡聞にして私は彼のことを全く知らなかった。本作はその張大磊監督が 2022 年に発表したものだが、パンフレットにある監督インタビューによると、「中国の若手映画監督の作品における多様な女性像を強調し、女性の物語の執筆を奨励する、『西寧 FIRST 青年映画祭』とシャネルの特別キュレーションプログラム『FIRST FRAMRE』のコラボレーションから始まった」そうだ。なるほど、なるほど。

その時点なら王一博は『無名』と『ボーン・トゥ・フライ』で大ブレイクする前のことだから、きっと出演料は安かっただろうし、周迅も旬を過ぎたベテラン女優(?)だから、全盛期に比べると出演料は格安・・・?かどうかは知らないが、『無名』(23 年)と『ボーン・トゥ・フライ』(23 年)で大ブレイクし、さらに『八月』を張大磊監督が大ヒットさせたのだから、同監督が発表した短編でも、今日本で公開すれば王一博人気に便乗して大ヒットするかも?24 分の短編 1 本だけの映画でありながら、1,300 円の一律料金という設定に驚かされたが、そんな強気の裏にはそんな映画戦略(儲け戦略)が・・・?

■時代は 1990 年、舞台は地方都市!ストーリーは単純!■

大阪では 2025 年 4 月 13 日から、1970 年に続いて 2 度目の世界万国博が開催されるが、1990 年の北京ではアジア競技大会が開催されていた。そんなことは今や全く私の記憶外だが、本作の時代は、その 1990 年。舞台は、中国のとある地方都市だ。

モノクロで薄暗い映像ながら、ある意味で極めて鮮明なスクリーン上に映るのは、アジア競技大会の閉会式を母親と共に TV で観ているシャオ・ジョウ(周迅/ジョウ・シュン)の姿。閉会式を実況中継するアナウンサーの言葉は印象的なフレーズが多いし、そこで歌われている大会歌も同様だから、母親が先に床に就いた後もシャオ・ジョウがそれを熱心に観ていたのは、ある意味で当然。そんなシャオ・ジョウの仕事は、映画製作会社の受付係らしい。会社ではアジア競技大会の垂れ幕やパンダのマスコット「パンパン」の撤去作業が行われていたが、シャオ・ジョウはその日の夜に、ホールで開催される従業員とその家族向けの映画の上映会の鑑賞券の配布と、もぎり役を担当しているらしい。

ジョウは「パンパン」の撤去作業を見ながら、時々やってくる従業員たちへの対応をしていたが、そこに遠方から戻ってきた詩人のリー(王一博/ワン・イーボー)が友人の張

晨（張晨（チャン・チェン））を訪ねてやってくることに。あいにく張晨は昼休みで家に帰っていたため、ジョウはリーに座って待つように告げたが、程なくして張晨が戻ってくると、2人は自転車置き場で懐かしそうに、さまざまな会話を・・・。

■□■原題は？銀幕での上映作品は？本作のテーマは？■□■

本作の邦題は『銀幕の友』だが、原題は『我的朋友』、また英題は『All Tomorrow's Parties』だ。そして、今夜の上映会の作品はフランソワ・トリュフォー監督の『大人は判ってくれない』（59年）だが、なぜ1990年の中国でフランス・ヌーヴェルヴァーグの代表作が上映されているの？日本は欧米諸国と同じく自由の価値が認められているが、中国はそうではない。したがって、自由に映画を作ることができず、戦時中の日本と同じような“検閲”がある。それは、1949年10月1日の新中国建国以来の国是（こくぜ）だから、まず、それがわかっていなければ、張大磊監督が本作の上映作品をなぜそれにしたのかわからないはずだ。その点については、張大磊監督は、『大人は判ってくれない』は通常の劇場で上映することは不可能で、映画スタジオで社内参考のために上映することしかできませんでした。」と語っているので、その言葉の重みを、自由が当たり前と思っている私たち日本人はしっかりかみしめる必要がある。

他方、『無名』でのスパイ役や『バーン・トゥ・フライ』でのパイロット役で強烈な印象を与えた若手イケメン俳優・王一博は、本作では眼鏡をかけた内気な詩人役を上品かつカッコ良く演じているので、それに注目！「詩人の帰還か！」と心よく彼を迎えた友人の張晨が、彼の詩集『青い列車』の一部を朗読する姿を見ていると、2人の信頼関係が深いことがよくわかる。

日が落ちるとホール内に人々が集まり『大人は判ってくれない』の上映が始まったが、もぎり作業を終えたジョウも後部座席に座って鑑賞していると、その前の席ではリーも座って鑑賞していたから、アレレ、アレレ・・・？本作のストーリーは極めて単純で、上映会が終わると同時に、本作もジ・エンドに。

■□■邦題はお見事！監督コメントは！■□■

『我的朋友』を原題とする本作の邦題は『銀幕の友』だが、以上のような単純なストーリーを観終わると、このピッタリの邦題はいかにもお見事！しかして、本作のテーマについて張大磊監督が語るコメントは、次のとおりだ。

これは別れと出会いについての短編映画である。私たちは、映画的方法で過去の特定の瞬間に戻り、昔の時代や劇中の登場人物を再訪する。昔の時代と登場人物を再訪する。私たちは彼らがこれまで何を経験したことを知らない。私たちは彼らの別れと出会いをただ傍観し見守るのだ。
--

なるほど、なるほど・・・。

2025（令和7）年2月21日記